

地域社会に対する誇りと愛情を育てる小学校社会科の単元開発

Curriculum Development of Elementary School Social Studies to Foster Pride and Affection for the Local Community

日置綾乃¹, 長倉 守²

HIOKI Ayano¹, NAGAKURA Mamoru²

[キーワード Keyword]	総合的な探究の時間, 持続可能な地域社会, 探究の高度化・自律化, SDGs
[所属 Institution]	¹ 高山市公立小学校 (Elementary School, Takayama City), ² 岐阜大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 現在の日本は急激な社会の変化により地域社会の存続や結びつきの希薄化が危惧され、学校教育では地域社会への関心を高める教育課程の重要性が指摘されている。小学校社会科学習指導要領では、特に第3・4学年で地域社会に対する誇りと愛情を育てることが求められているが、研究や実践は限定的である。そこで本稿では、地域社会に対する誇りと愛情に関する構成要素や社会科の学習モデルについて検討し、その視点をもとに単元カリキュラムを開発することを目的とした。これにより肯定的な評価、愛着、地域発展への願いといった地域社会に対する誇りと愛情の育成を目標とする授業モデルの提案が可能になった。

1. はじめに

1.1 社会の変化と学校教育の課題

現在日本は少子化による人口減少、高齢化、グローバル化、第4次産業革命の進展など社会の大きな変化の中にあり、地域社会においては、地域経済の縮小や、地域の伝統行事等の担い手の減少、人と人とのつながりの希薄化による社会的孤立の拡大など様々な課題に直面している。中でも特に核家族化や人口減少の進行により、地域社会における子ども大人が関わる機会が減少しているといえる。

こういった機会の減少は地域資源の継承を難しくし、子どもたちの自らの生まれ育った地域社会に対する誇りと愛情、学びの機会の喪失をもたらす。これにより生まれ育った場所に住み続けたい、自分の住む地域をよりよくしたいという気持ちや願いが失われ、ますます地方から都市への人口流出が加速し、それに伴い地域の人口減少と過疎化が進むことで、地域における社会的な基盤の維持を困難にし、地域の衰退をより進行させることが危惧される。

このような事態を防ぐため、近年、都市に対する市民の誇りと一般的に定義されるシビックプライドの概念が注目されており、地域社会をよりよい場所にするために自分自身が関わろうとする地域住民の育成が求められている。例えば岐阜市においては、シビックプライドを「これまで永年にわたって積み重ねてきた歴史的な風土や文化、先人たちの過去の記憶に敬意を払いながら、市民ひとりひとりがこれからも岐阜の地で楽しく豊かに暮らし続けていくための原動力となる、人々の誇り・思い・心意気のこと」と説明し、2020年から積極的なシビックプライドの醸成を進めている。

シビックプライドの醸成には様々な方策が模索されているが、その一つに児童生徒に対する方策として、小中学校における社会科の授業が注目されている。シビックプライドにおいては地域社会に対する「誇り」がキーワードとして取り上げられているが、これは小学校社会科で育成が目指される「地域社会に対する誇りと愛情」に関する資質・能力と関連があると考えられる。シビックプライドといった行政的課題からも地域社会に対する誇りと愛情の育成の必要性をうかがうことができる。

学校教育においては、社会に開かれた教育課程を通じ、地域社会への理解を深め、生まれ育った場所に対する誇りや愛情を養い、関心を高める資質・能力の育成が求められている。こうした資質・能力を育成する中核となる教科は社会科である。小学校社会科学習指導要領（文部科学省 2017）では、教科の目標のうち、学びに向かう力・人間性等の観点において、「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする

る態度やよりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。」と示されている(表1)。特に第3・4学年においては、内容の部分において、身近な地域や市区町村の様子について学習の問題を追究・解決することを通して指導が示されており、地域社会に視点をおき、こうした目標を目指した学習が求められている。小学校社会科では、地域社会に対する誇りと愛情を育成していくことが一層求められるようになっていく。

表1 小学校社会科第3・4学年の目標

知識・技能	(1) 身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的な資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身につけるようにする。
思考・判断・表現	(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。
学びに向かう力・人間性等	(3) 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

1.2 地域社会に対する誇りと愛情の育成における課題

小学校社会科における地域社会に対する誇りと愛情の育成に関する先行研究や先行実践ではどのような検討が行われてきたのであろうか。先行研究や先行実践では、地域社会に対する誇りと愛情についての論議や実践の蓄積が少ない状況が見られる。相澤(2018)は、社会科の目標として設定された愛情に着目し、その項目を達成する具体的な手立て・実践にまで目を向けている研究は著しく少ないと指摘している。その理由として、愛情を主眼とした実践自体が少ない、研究者や実践者が意図的に関心を向けていない、研究課題として取り上げるうえでの何らかの困難の存在に言及し、社会的な要請に関わらず、そもそも実践が少ないことが課題である点を指摘している。

こうした背景には、学習指導要領において、地域社会に対する誇りと愛情を養うと記述されているものの、それらが具体的にどういった姿なのか説明されていないことがあると考える。たしかに澤井ら(2019)における小学校3年生の学習目標を検討したところ、身近な調査の単元では、地域の様子について主体的に追究・解決することができる、自分たちの住む地域への関心を高めている、が目標として設定されており、地域に見られる生産の仕事では、主体的に追究や解決をしようとしている、学んだことを自分の生活と結びつけて考えようとしている、が目標として設定されている。地域社会の一員としての自覚を養うことに焦点を

表2 小学校第3学年における単元の目標例

単元名	評価規準	
身近な地域の調査	地域の様子について主体的に追究・解決することができる。 自分たちの住む地域への関心を高めている。	
地域に見られる生産の仕事	納豆づくりに対し、主体的に追究・解決することができる。 生産活動に関心をもち、良さを考えることができる。	
地域に見られる販売の仕事	主体的に追究や解決をしようとしている。 学んだことを自分の生活と結びつけて考えようとしている。	
3年	事故から安全を守る	主体的に追究や解決をしようとしている。 地域社会の一員として協力できることは何か考えることができる。
火災から安全を守る	主体的に追究・解決することができる。 地域の一員として何ができるかを考え、実践することができる。	
市の様子の移り変わり	主体的に追究・解決することができる。 市の発展について市民の一人として考えようとしている。	
市の様子の移り変わり	主体的に追究・解決することができる。 まちの発展について地域の一員として考えようとしている。	
市の様子の移り変わり	主体的に追究・解決することができる。 これからのよりよい市の在り方について、市民の一人としてとして考えようとしている。	

澤井ら(2019)をもとに筆者作成

当てた目標を設定した授業は多く存在するが、地域社会に対する誇りと愛情を目標に置いた社会科の実践は管見の限り見られない。

また、このような実践は今後においても重視されない可能性がある。それは現行の学習指導要領を踏まえた観点別学習状況評価が関連している。学習指導要領が示す資質・能力のうち、学びに向かう力・人間性等については、観点別学習状況評価においては主体的に取り組む態度のみが対象となるため、地域社会に対する誇りと愛情といった社会科で育成が求められる人間性等については、教師から重視されなくなる傾向が生じることが考えられる。実際、東京書籍（2020）の社会科年間指導計画において、目標や評価規準の項目には主体的に学習に取り組む態度のみが記述されており、地域社会に対する誇りと愛情のような人間性に着目した授業計画は見られない。

そこで本稿では、小学校社会科教育において求められる、地域社会に対する誇りと愛情を育成するカリキュラムを開発するため、地域社会に対する誇りと愛情に関する概念を検討するとともに、カリキュラム開発の基盤となる学習モデル及び単元カリキュラムを開発することを目的とする。これにより、学校現場における日々の社会科の単元カリキュラムにおいて、地域社会の担い手となるために必要な資質・能力の育成を図ることを目指す授業開発の基盤が提示できると考える。学習指導要領の趣旨を踏まえつつ、発展的な単元開発も期待され、これまで実践の少なかった地域社会に対する誇りと愛情に着目した授業実践の分野において、一つの学習モデルや単元モデルを提示し、小学校社会科における地域社会に対する誇りと愛情を育成する授業実践研究に寄与するとともに、学校現場に実践的な貢献ができると考えられる。

2 地域社会に対する誇りと愛情の検討

ここでは、地域社会に対する誇りと愛情について検討を行う。まず小学校社会科を基軸として関連性のある特別の教科道徳を含めて、学習指導要領や教科書について検討を行った。小学校学習指導要領解説社会科編では、地域社会に対する誇りと愛情について、その要素も含めて明確な説明は見られない。また教科書においては、誇りと愛情に関連する語句として「興味」、「もっと知りたい」等の語句を見出せるが、誇りや愛情といった直接的な表現は見られない状況であった。また地域社会に対する誇りと愛情について関連の深い道徳科の学習指導要領では、内容項目C主として集団や社会との関わりに関すること中の伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度において、「我が国や郷土の伝統と文化を大切に、国や郷土を愛する心をもつこと」と示されているが、こちらにおいても誇りと愛情に関連すると考えられる「愛する心」に対する具体的な要素の説明は見られなかった。また、上述のとおり地域社会に対する誇りと愛情に着目した先行研究は限定的である。

そこで視点を広げ、教育学的な視点に留まらず、都市工学や環境心理学に視点を広げ、これらの分野において検討される「地域愛着」という概念に着目し、学習指導要領における趣旨との照合を図りながら、小学校社会科教育において育成を目指す地域社会に対する誇りと愛情に関する構成要素について検討を行った。

都市工学の分野では、藪谷・阿久井（2021）が選好、感情、持続願望の地域愛着の要素を用いて、地域接触が地域愛着形成に与える影響について言及している。選好は、個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度、感情はそうした嗜好を超えて、当該地域に慣れ親しんだものに強く惹かれ、離れがたく感じる程度、持続願望は、思考や感情といった現状の地域に対する認知的、情緒的な地域への心的関与のみを意味するものではなく、地域のあり方のそのものに対して願いを抱くという地域愛着を意味するものと説明されている。環境心理学の観点からは、引地・青木（2005）が、地域愛着が人々と特定の地域との間の情緒的な絆や繋がりであると説明している。大谷ら（2003）は、地域愛着の要素について、場所愛着と関与愛着の概念を用いて説明している。場所愛着とは、このまちを歩くのは気持ちが良い、雰囲気や土地柄が気に入っていると場所自体を好ましいと感じる認識である。関与愛着とは、まちに思い出がある、まちに自分の居場所がある気がするといった地域に自分が関与していると感じる認識である。これは先述した藪谷・阿久井との類似点が見られる。

また、地域社会に対する誇りと愛情の要素として、シビックプライドの概念にも着目する。シビックプライドは、上述のように都市に対する市民の誇りと定義づけられるが、その具体的内容については各地方公共

団体によって異なる。例えば岐阜市では、市民ひとりひとりがこれからも岐阜の地で楽しく豊かに暮らし続けていくための原動力となる人々の思いとして説明されており、これは、上述の藪谷・阿久井の地域愛着・感情の要素や大谷らの場所愛着の要素と関連するといえる。

以上の検討から、本研究における誇りと愛情の構成要素として藪谷・阿久井で使用されている要素を基軸として「肯定的な感情」、「愛着感情」、「地域発展への願い」の3つを析出した。「肯定的な感情」は藪谷・阿久井における選好、大谷らの場所愛着の要素から析出したものである。先行研究では、住みやすい、気に入っている、お気に入り気持ちがよい、リラックスできる、好きだというキーワードに表れるものが、選好や場所愛着の要素であると述べられていたが、小学生を対象とした実践開発に向けて発達段階を考慮し、住みやすい、気に入っている、お気に入り、気持ちがよい、リラックスができるといった要素を「よい場所」という言葉に言い換えた。また、好きだ、は児童が普段の生活の中でもよく使う表現であり、その語句の意味が小学生にも理解されると考えたことから、そのままの表現を採用し、要素として整理した。

「愛着感情」は藪谷・阿久井における、感情、大谷らの関与愛着の要素から析出したものである。先行研究では、大切、愛着を感じる、居場所がある感じがする、自分の町だと感じる、もっと住み続けたい、思い出がある、というキーワードで表出するものであるとされている。また岐阜市のシビックプライドにおいては、暮らし続けていく、という部分に表れている。これらのキーワードに表れる要素を基盤にしつつ、小学校社会科学学習指導要領でも使用されており、かつ児童が生活の中で使用していることから小学生にも理解が可能であると考え、「大切」という語句を要素として析出し整理した。また、愛着を感じる、居場所がある感じがする、自分の町だと感じるといった要素は小学生にその意味や意図に関する理解が困難であると判断し、児童に意味が理解されやすい「これからも住み続けたい」というキーワードを採用した。なお、要素の整理・検討にあたっては、小学校現職教師（小学校3年生学級担任1名）に、小学生の発達段階の観点から助言を得た。

「地域発展への願い」は藪谷・阿久井における、持続願望、シビックプライドにおける、原動力となる人々の思い、の要素を参考に析出したものである。先行研究では、いつまでも変わってほしくないものがある、なくなってほしくないものがあるといったキーワードを用いて説明されている。ここで、小学校社会科学学習指導要領第3学年の学びに向かう力・人間性等の「よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする」に着目すると、学習指導要領では、現在の状況が変わらず続くという持続の要素よりも「よりよい社会」や「学んだことを社会にどう生かしていくか」という地域のこれからの視点が向けられた要素であると整理した。またシビックプライドの観点からも、楽しく豊かに暮らし続けていくための原動力という部分は地域の未来に目を向ける要素が含まれているといえる。藪谷・阿久井における持続願望の要素の視点を地域の未来に向け、もっとよくなってほしい、（これからも）なくなってほしくないというキーワードで表れる地域の未来に目をむけた「地域発展への願い」を地域社会に対する誇りと愛情の構成要素として採用した。

以上の検討から、地域社会に対する誇りと愛情の構成要素を整理したものが表3である。これらの項目を学びに向かう力・人間性等における地域社会に対する誇りと愛情として涵養を目指す。

表3 地域社会に対する誇りと愛情に関する構成要素

肯定的な感情	岐阜市が好きだ
	岐阜市はよい場所だと思う
愛着感情	岐阜市は大切な場所だと思う
	岐阜市にこれからも住み続けたいと思う
地域発展への願い	岐阜市にもっとよくなってほしいと思う
	岐阜市になくなってほしくないものがある

3 小学校社会科における学習モデルの検討

次に、前節で検討した構成要素を育成する単元開発を行うために学習モデルについて検討を行う。学習指導要領では、表1に示したように、地域社会に対する誇りと愛情の育成に向けて思考や理解を通じた育成が

想定されている。しかし現状では、地域社会に対する誇りと愛情の育成を主たる目的とした思考や理解を促進する学習活動が設定されている状況が見られない。先行研究においてもカリキュラム開発の基盤となる理論的検討がなされているわけではなかった。他方、上述の引地らは、居住年数が長いほど地域への愛着が強くなるという居住年数効果の再確認や、地域活動への参加と地域への愛着の強弱に関係があることを示していた。

そこで、社会科に隣接した教科等である生活科や道徳科に視点を広げて検討を行う。生活科においては、自然、社会、自分自身を含む身近な人が学習対象とされており、身近な場所や人々に親しみをもつことが目標の一つとされている。その目標を達成する手立てとして、解説では、繰り返し関わる事が述べられている。また、特別の教科道徳では、解説において、伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度において、第1・2学年では、「児童が住む町の身近な自然や文化などに直接触れる機会を増やしたり、そこに携わる人々との触れ合いを深めたりすることで、国や郷土への愛着を深め」ること、第3・4学年では「地域の人々や生活、伝統文化に親しみ、それを大切にすることを通して、郷土を愛することについて考えさせ、地域に積極的に関わろうとする態度を育てること」、第5・6学年では、「機会をとらえて我が国の伝統や文化などを話題にしたり、直接的に触れたりする機会を増やすことでその良さについて理解を深めること」とそれぞれの学年で具体的な手立てが示されている。

このように生活科や道徳科における概念を踏まえると、親しみをもつことや、愛着、愛情を育成する学習方略として、繰り返し関わること及び直接触れることの二点が鍵概念として整理される。上述の引地らの枠組みを用いて検討するならば、繰り返し触れることについては地域愛着の居住年数効果、直接触れることは地域活動への参加が愛着形成につながるという議論に対応している。この点については、相澤（2017）が具体的な人物を取り上げることで地域社会への関心や愛着が高まる可能性があることを指摘している。

以上の先行研究や関連教科等の学習指導要領の検討から、本稿では小学校3年生の発達段階を考慮し、地域社会に対する誇りと愛情の育成にあたっては、繰り返し触れること及び直接触れることを基軸に置き、これらを社会科における思考や理解との融合を図る学習モデルの開発を目指す。そこで、社会科に視点を戻して検討を行う。

社会科教育においては、思考や理解を基盤に愛情を育成することを重視してきた。相澤（2018）はこの点について、現行の学習指導要領においてもこれまで通り思考や理解を通じて愛情を養うという構図は維持されていると指摘している。しかしその一方で、理解した学習対象と学習者自身のつながりが実感できなければ愛情や自覚が育つことはないとも言及している。これについては、自身と学習対象のつながりが実感できる学習モデルの検討が必要であるということが指摘できる。そこで、これまで行われてきた社会科の授業づくりを参考に、表3で示した要素の涵養に向けて学習モデルを検討する。

社会科教育における授業づくりに関しては、問題解決型学習、理解型学習、説明型学習、議論型学習、意思決定型学習、社会参加型学習の大きく6つの方法に整理されている（社会科教育実践ハンドブック2011）。このうち、自身と学習対象のつながりを実感できることから、本稿では理解型学習モデルを学習モデルの基盤として援用する。理解型学習モデルは、学習対象となる社会事象がどのような意図や願いで生み出されてきたのか、その事象が社会の全体的連関の中でもつ価値や社会的意味をもつのか、という二つの意味理解を探究する学習である。

この理解型学習の過程について説明する。まず、学習対象の認知として人物に関する状況の把握である。次に、対象となる人物の状況下における願いや心理を把握するとともに、自分だったらどうするかを追体験的に予想し、実際の対象人物が行った行為を調査検討する。最後に行為の社会的意味理解が行われ、自己との関わりを基盤に社会への影響や変化について考える。

理解型学習モデルでは、単元開始時に会う学習対象者が中心となって学習が進んでいくため、先ほど愛情の育成に必要であると述べた、繰り返し触れることが単元を通して実現されることになる。また、直接触れることは、学習対象者が地域で活躍する人物であることから、インタビューや見学などで実現が可能になると考える。

以上のことから、学習モデルとして、次の三つのフェーズを設定する。

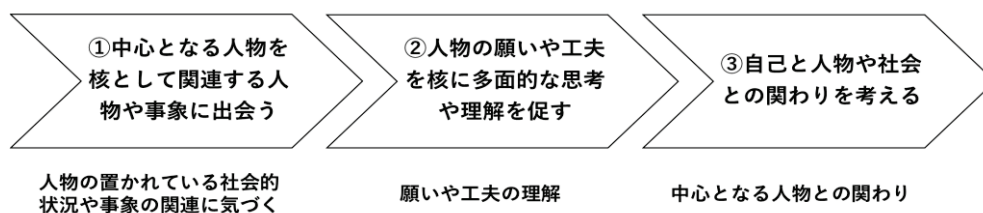


図1 地域社会に対する理解と愛情の育成に関する学習モデル

学習モデルとして設定する三つのフェーズは次のとおりである。

①中心となる人物を核として関連する人物や事象に出会う

中心となる人物を通して、人物が置かれている社会的状況や事象の関連に気付けるようにする。

②人物の願いや工夫を核に多面的な思考や理解を促す

中心となる人物の願いを共感的に捉え、資料などからその人物の願いや工夫が社会に対して与える影響について多面的に思考し理解することを促す。

③自己と人物や社会との関わりを考える

中心となる人物との関わりを感じ、自己と社会とのつながりについて考えることを促す。

フェーズ①では、理解型授業モデルで示されている学びの過程における、①対象の認知に対応する学びである、繰り返し触れることや直接触れることの基盤となる学びの段階である。理解型学習モデルにおいて学習対象者として扱われていた人物を学習モデルでは中心となる人物とした。これは、単元を通じて当該人物が学習の中核であることを明確にするためである。このフェーズの学びにおいては、児童が中心となる人物と出会い相手を認知し、どのような人物なのか、何をしている人なのかを理解することを目指す。単元カリキュラムに翻案した際には、前節で示した地域社会に対する誇りと愛情の3要素のうち、肯定的な感情や愛着感情が育成されることを目指す。

フェーズ②では、中心となる人物の願いや工夫を核に多面的な思考や理解を促す段階である。これは、中心となる人物の願いを共感的に捉えることから、思考や理解を促すため、理解型学習モデルにおける自己投入や追体験の過程に対応する。また、相澤（2018）が指摘した思考や理解を通じて誇りと愛情を養う過程で、学習者自身と学習内容のつながりが実感できる手立てが必要であるという点において、フェーズ②の学びに共感的な学びを取り入れることによって思考や理解を通じた誇りと愛情の育成が可能になると考える。単元カリキュラムへの翻案の際には、フェーズ①同様、肯定的な感情や、愛着感情が育成されることを目指す。

フェーズ③については、中心となる人物と自分の関わりを感じ、自己と社会のつながりについて考えることを促す段階である。これは、理解型学習モデルにおける意味の把握に対応する。これによりフェーズ②においても示した、学習者自身と学習内容の関連を感じることができ、思考や理解を通じた誇りと愛情の育成が可能になるといえる。また、自己とのつながりを考えることは、社会に参加していくことにつながるため、直接触れることが間接的に達成されるといえる。本フェーズを単元カリキュラムに実装する際には、地域社会に対する誇りと愛情の3要素のうち、地域発展への願いが育成されることが期待される。

これらの学習過程により、中心となる人物を核として教材を通して、単元を通して地域接触の場を設定し、地域社会に対する誇りと愛情を育むようにする。

4 単元カリキュラムの開発

前節までの検討をもとに、学習指導要領における小学校3年生の内容項目である、地域に見られる生産の仕事事例に、表4のとおり単元計画と各フェーズの関連を整理した。単元における学習の展開と各フェーズとの関連及び各授業で育成を目指した資質・能力を示した。表は左から次の三つに区分して整理した。

一つは、単元における各時間の指導事項とねらいである。児童の視点からは、これらは各時間における学習内容を端的に示した学習項目であり、またねらいについては各時間の学習の目標となる。教員の視点から

表 4 単元計画と各フェーズの関連及び育成を目指した資質・能力

単元名	はたらく人とわたしたちの暮らし 1. 農家の仕事		学びに向かう力・人間性等			
	本時のねらい	フェーズ	知識 技能	思考 判断 表現	主体的に学 習に取り組む 態度	地域社会に 対する誇りと 愛情 地域発展 一員として の自覚
小単元の目標	地域に見られる農家の仕事について、農家の仕事について、農家の仕事をしながら生産に関わる人びとの様子を捉え、自分たちの生活とのつながりについて考え、表現することを通して農家の仕事は地域や自分と密接な関わりをもって行われていることを理解できるようにするとともに、自分たちの住む地域への肯定的な感情や愛着、地域社会の発展について主体的に学習問題を追究・解決しようとする態度を養う。					
項目						
1 えだまめづくりの方法	身近な岐阜市での農作物の生産の様子について知る活動を通して、農家の仕事と自分たちの暮らしの関わりに関心をもつことができる。	①		●	◎	
2 えだまめづくりの工夫①	枝豆づくりに関する資料を読み取り、Aさんの枝豆作りがどのように行われているかを知る活動を通して、枝豆づくりがこだわって行われていることに気づき、岐阜市の枝豆に対する肯定的な気持ちをもつことができる。	①・②	●		◎	○
3 えだまめづくりの工夫②	えだまめをおいしく安全にするための工夫に関する資料を読みとる活動を通して、安藤さんが食べる人に安心しておいしいえだまめを食べてもらえるように工夫しているという思いに気づき、まとめることができる。	②・③	●		○	◎
4 ぎふえだまめの行方	枝豆の選別から出荷までの資料を読み取ることを通して、わたしたちのもとへおいしい枝豆を届けようとしていることを理解することができる。	②・③	●		◎	○
5 えだまめ農家さんの思い	枝豆のこれからとそこに自分がどう関わっていくかを考える活動を通して、これまでの学びと自分自身の生活をつなげることができる。	③		●		◎

は、提示した目標の達成を目指して内容を取り扱うこととなる。

二つは、図1で示した学習モデルにおける項目との関連である。フェーズ①中心となる人物を核として関連する人物や事象に出会う、フェーズ②人物の願いや工夫を核に多面的な思考や理解を促す、フェーズ③自己と人物や社会との関わりを考えるとの関わりを示している。各時間の学習内容が学習モデルにおいてどの段階の学びなのかについて表している。

三つは、各時間で重点的に育成を目指す資質・能力についてである。各時間の学習内容が学習指導要領の知識・技能、思考・判断・表現、学びに向かう力・人間性等のどの部分の育成を目指しているのかを示している。このうち学びに向かう力・人間性等については、地域社会に対する誇りと愛情の構成要素を用いて細分化し、各時間で育成を目指す力について明確にした。

次に単元の内容について説明する。この単元では、目標を「岐阜市の特産品である『岐阜えだまめ』を通して地域に見られる農家の仕事について、農家との関わりから生産者の願いや意図に着目し、生産に関わる人びとの様子を捉え、自分たちの生活とのつながりについて考えることを通して、農家の仕事は地域や自分と密接な関わりをもっていることを理解できるようにし、地域への肯定的な感情や愛着をもち、地域社会の発展について考えようとする態度を養うこと」とした。この目標は、上述のとおり、これまでの実践では見られなかった地域社会に対する誇りと愛情を育成することを目指すというものである。各フェーズの要素である、農家さんとの関わり、関わりを通じた思考・理解、自分たちの生活とのつながりを目標の文言に落とし込み、それらの学びを通して地域社会に対する誇りと愛情を構成する地域への肯定的な感情、愛着感情、地域発展への願いを育成することが明示的な目標を設定した。

単元計画については、本単元カリキュラムは全5時間である。第1時に本単元の学習内容に関する疑問を出し合い、第2時から第4時は、農家さんに対するインタビューへの回答や資料を基にした疑問の解決、第5時は本単元の総括である。

本実践では、コロナ禍により農家との直接的な関わりを通じた学びが困難であったため、事前に授業者がインタビューをした農家の様子を授業で提示し、授業で生じた疑問については授業後に農家と連絡を取り回答を得る方法により、児童と農家の関わりをもたせた。

5 おわりに

本稿では、地域社会に対する誇りと愛情や学習モデルについて検討し、その視点をもとに単元カリキュラムを開発することを目的とした。成果としては次の三点である。

一つは、地域社会に対する誇りと愛情の構成要素の析出である。これまで学習指導要領や教科書において具体的な説明が見られない部分に関して、社会科教育においては議論の蓄積が限定的であったため、関連する都市工学や環境心理学といった他分野の先行研究を踏まえ、地域愛着の概念に着目し、小学校社会科において求められる地域社会に対する誇りと愛情の構成要素を析出した。この結果、単元を通して育成したい児童の姿が明確化された。

二つは、析出した地域社会に対する誇りと愛情の3要素を育成するための学習モデルの開発である。これまで社会科で実践されてきた理解型学習モデルを基盤として、地域社会に対する誇りと愛情を育成するため3つのプロセスによって構成される学習モデルを開発した。

三つは、上述の3要素を内包する資質・能力の枠組みと学習モデルに基づいた単元の開発である。学習指導要領をもとに実践校の実態に応じつつ、単元の目標を本実践で育成を目指す地域社会に対する誇りと愛情の構成要素の枠組みから検討した。また学習活動については、学習モデルと単元で取扱う地域資源から検討し、単元の開発を行った。

今日の社会においては少子高齢化や人口減少が進み、学校教育では社会に開かれた教育課程を通じて地域社会への関心を高め、理解を深める資質・能力の育成が求められている。その中心となる社会科において、地域社会に対する誇りと愛情の内容を整理し、学習モデルを開発したことは大きな意義があると考えられる。本稿で提示した学習モデルおよび単元カリキュラムは、学習者の実態や学習内容に応じて授業者によって応

用されることが期待される。これまで先行研究や先行実践の少なさが指摘されていた分野において学習指導の一つのモデルを提示することができ、学校における実践や実践研究の活性化に寄与することができるのではないかと考える。今後の課題は、実践の具体的検討とその検証である。継続的に検討を進めていくこととする。

引用・参考文献

- 相澤亮太郎（2017）地域への愛着を育てる小学校社会科の地域学習指導のために、甲南女子大学研究紀要、53、pp.9-15
- 相澤亮太郎（2018）小学校社会科の学習指導における「愛情」目標とその実践、甲南女子大学研究紀要、54、pp.15-22
- 大谷華・芳賀繁（2003）地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響、Rikkyo Psychological Research、45、pp.1-9
- 大谷華（2013）場所と個人の情動的なつながり—場所愛着、場所アイデンティティ、場所感覚—、環境心理学研究、1（1）、pp.58-66
- 澤井陽介（2019）見方・考え方を働かせて学ぶ社会科授業モデル3・4年生、明治図書、192p.
- 全国社会科教育学会（2011）社会科教育実践ハンドブック、明治図書、p.236
- 東京書籍（2020）「新しい社会」年間指導計画作成資料【3年】、48p.
https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou_current/shakai/data/shakai_keikaku_s_3_20200214.pdf（参照2023-10-20）
- 引地博之・青木俊明（2005）地域に対する愛着形成の心理過程の検討、景観・デザイン研究講演集1、pp.232-235
- 森分孝治（1999）社会科教育学研究—方法論的アプローチ入門、明治図書、174p.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編、日本文教出版、217p.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編、廣済堂あかつき、167p.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編、東洋館出版社、152p.
- 藪谷祐介・阿久井康平（2021）、高校生の通学時における地域接触が地域愛着形成に与える影響、日本都市計画学会都市計画論文集、56(3)、pp.772-779
- 渡部竜也（2009）地域の何を、どのように、なぜ教えていくのか—日本社会科教育学会春季研究会「郷土愛は可能か？」の報告—、日本社会科教育学会、社会科教育研究、108、pp.70-74

